

# 法成寺・中川・空蟬

磯野浩光

## 1

平成26年(2014)9月、約2年半に及ぶ平等院の国宝鳳凰堂(中堂、両翼廊、尾廊)の建造物保存修理事業(平成修理)が竣工した。この国宝建造物は、世界文化遺産「古都京都の文化財」17社寺城の構成資産の一つであり、昭和26年(1951)に現行の10円硬貨のデザインになったように日本を代表する文化財建造物である。保存修理事業は、約60年ぶりに行われたもので、柱など木部の外装を丹土塗とし、軒瓦の文様を発掘調査で確認された河内向山系に改めるなど可能な範囲で平安時代の姿に近づけることに力が注がれたため大きな話題となり、この年の京都の10大ニュースの一つに選ばれた。<sup>(注1)</sup>

平等院は、藤原頼通が父道長から譲られた宇治の別業を寺院に改めたものである。鳳凰堂は末法初年(1052年)の翌年天喜元年(1053)3月に建立され、その姿は周囲の庭園と合わせて「極楽いぶかしくは 宇治の御堂を うやまうべし といふ故なり。」(『後拾遺往生伝』下巻第25話)とあるように、まさに極楽浄土を現出させたものとして耳目を集めた。その浄土教信仰の原型は、父道長が平安京の東、鴨川の西に造営した法成寺である。

法成寺の遺跡は、市街地となり、京都府立鴨沂高等学校(京都市上京区寺町通荒神口下る松蔭町)の敷地も広大な遺跡の一角に当たると推定されている(写真1)。平成26年(2014)6月から、同高校の校舎改築に伴う発掘調査が京都府埋蔵文化財調査研究センターによって実施されている。そこで、小稿ではこの法成寺跡の調査を契機に、法成寺の西を流れていた中川と



写真1 法成寺跡の石碑(鴨沂高校)

『源氏物語』、謡曲「碁」に関連することなどを覚書きのように述べてみたい。

## 2

藤原道長(966~1027)は、平安時代中期、摂関政治の全盛を築き、栄華を極めた公卿として特に有名な人物である。その要因としては、才能と多くの娘に恵まれたという幸運のほか、長徳元年(995)の疫病による高位高官貴族の死亡、国母となった姉、東三条院詮子の支援、藤原氏内部の政争(長徳の変)の勝利が指摘されている。そして、長徳元年(995)に関白に準じる内覧と右大臣(翌年に左大臣)、「一上」(太政官機構の首班)に相次いで任じられてから、約30年間にわたって政権を掌握した。後一条天皇即位に際しては、1年余り摂政にも任じられ、3人の娘をそれぞれ一条、三条、後一条天皇の中宮として天皇との外戚関係の維持に努め、貴族社会の頂点に立った。寛仁元年(1017)12月には太政大臣となるも、わずか2か月で辞し、この後も「大殿」として依然大きな影響力を保った。寛仁2年(1018)10月、娘の威子が後一条天皇の中宮となって「一家三后」が実現した時、「この世をば 我世とぞおもふ 望月の かけたることも なしと思へば」(『小右記』寛仁2年10月16日条)と、権勢と栄華を誇ったことはよく知られている。当時の公卿たちも道長一家について、一家の栄華は古今に比べようがない、いったい前世にどんな善根を植えたのでこのように栄えるのだろうか、と感嘆している(『権記』寛仁元年8月21日条)。

なお、関白には任じられなかったが、実質的にはそれと変わらぬ地位と実力を持ったので、後に「御堂関白」と称され、その日記は江戸時代には『御堂関白記』と呼ばれた(国宝<sup>(注2)</sup>)。この「御堂」は他でもない法成寺(特に阿弥陀堂)を指しているのである。

法成寺は、寛仁4年(1020)3月に九体阿弥陀堂、治安2年(1022)7月に金堂と五大堂の落慶供養が行われ、平安時代中期に最も栄えた寺院であった。2町四方、南北は3町に及んだとも想定される広大な敷地には、普請好きの道長が晩年の大半を費やして造営した金堂、無量寿院(阿弥陀堂)、五大堂、十齋堂、薬師堂、釈迦堂、塔、東北院、西北院等の伽藍が建ち並び、苑池も設けられていた。その豪華な様子は、「奈良は七大寺・十五大寺など見くらぶるに、なほこの無量寿院いとめでたく、極楽浄土のこの世にあらはれけると見えたり。」(『大鏡』第5巻太政大臣道長上)、「この御堂を御覧ずれば、七宝所成の宮殿なり。宝楼の真珠の瓦青く葺き、瑠璃の壁白く塗り、瓦光りて空の影見え、大象のつめいし、紫金の棟、金色の扉、水精の基、種々の雑宝をもて荘厳し嚴飾せり。」(『栄花物語』巻第17おむがく)、「御堂あまたにならせたまふまに、浄土はかくこそはと見えたり。」(同巻18たまのうてな)などと描写されている。外祖父摂政として権勢を誇った道長は、万寿4年(1027)12月、彼の栄華を象徴するこの寺院の阿弥陀堂で62歳の生涯を閉じたのである。

その後は、天喜6年(1058)2月にほぼ全焼するなどたび重なる火災、地震、洪水等で衰退し、鎌倉時代末期にはかろうじて無量寿院などが存在したことが記されている(『徒然草』第25段)が、元弘元年(1331)10月の火災で延焼し(『花園天皇宸記』元弘元年10月7日条)、さしもの法成寺の法灯は消えてしまったのである。

### 3

法成寺については、多くの研究の蓄積があり、枚挙にいとまがない。管見に入った主なものでは、歴史学の家永三郎、建築史学の福山敏男、杉山信三、清水擴氏などの研究がある<sup>(註3)</sup>。また、道長に関する著作、論考では必ずその晩年に造営された法成寺に言及している<sup>(註4)</sup>。これらの研究は、いずれも『御堂関白記』、『小右記』、『権記』などの同時代の日記や『栄花物語』、『大鏡』という歴史物語の記事を仔細に検討し、法成寺以降に造営された平等院や法勝寺と対比したり、道長政権の特徴を検討した精緻なものである。

一方、遺跡の周辺では土木工事等に伴って発掘調査等が実施されているが、法成寺の遺構はほぼ未検出であり、道長が贅を尽くして造営した大寺院の遺構を目の当たりにすることはできない。ただ、明治44年(1911)の京都御所清和院御門前の水道管工事、昭和9年(1934)の鴨沂高校の前身学校(府立京都第一高等女学校)の運動場造成工事、平成10～13年(1998～2001)の京都迎賓館建築に先立つ発掘調査などで、平安時代中期から後期の瓦が多数検出されている<sup>(註5)</sup>。この中で特筆すべきは、緑釉瓦の出土である。釉薬を用いて発色させた瓦は、日本では平城宮東院の玉殿に葺かれた「瑠璃之瓦」が最古の例とされ、平安時代になって緑釉瓦が多く葺かれた。ただ、平安宮内の大極殿や豊楽殿等と平安京内の東寺、西寺、神泉苑だけに限られたように、公的、重要な建物にしか用いられなかった。このように貴重な緑釉瓦が、先に見た『栄花物語』の記述を裏付けるように法成寺跡近辺から出土するのは、道長建立の所以である。平成26年(2014)の府立鴨沂高等学校校舎改築に伴う府埋蔵文化財調査研究センターの発掘調査と、それと同時に実施された府教育委員会の立会調査でも数点の緑釉瓦が検出されており<sup>(註6)</sup>、緑釉瓦は法成寺跡を特徴づける出土遺物と言えよう。法成寺跡出土緑釉瓦は、寛弘4年(1007)8月に大和国金峯山(奈良県吉野郡天川村)に道長自ら埋納した金銅経筒(国宝)とともに彼の権勢と栄華を伝える数少ない実証的な史料である。次に法成寺の周辺に少し目を転じてみたい。

### 4

法成寺は、「中河御堂」(『左経記』寛仁4年正月19日条、同4年3月18日条など)とも呼ばれたように、平安時代中期には法成寺の近くに「中川」(中河とも記す)と呼ばれた河川

が流れていた。道長が亡くなった翌年の長元元年(1028)9月の洪水の記事によると、中川からあふれた水は法成寺の西門から入って被害をもたらしており(『小右記』長元元年9月3日条)、法成寺の西に接して流れていたと考えられる。『拾芥抄』に、京極川を中川と号くとあり(中巻第22、京程部)、室町時代の『源氏物語』の注釈書である『河海抄』には、京極川の二条以北を中川と言うとの説を引用しており(巻第2、なか川のわたり)、東京極大路に沿って流れていた京極川の別名らしい。また、「いかなれば 流れは絶えぬ 中川に 逢ふ瀬の数の 少なかるらん」(『千載和歌集』巻第14恋歌4、889番、藤原顕家)のように、中川の中を男女の仲につなげて、歌枕にもなっていることから、近世の地誌にも種々取り上げられている。<sup>(註7)</sup>

史料に基づく研究もあるが、現在は暗渠となつて実見できず、その名の由来、流路、時代的変遷など不明な点も多い。ここでは、「中河は、東京極川とも呼ばれ、東の京極大路(現在の寺町通)の東側を流れていた川である。地名としての中河は、広幡以北、つまり近衛大路以北の中河の流域を指していた。」<sup>(註9)</sup>及び「(中河は)東京極大路に沿って流れる川である。のちには今出川の下流部分をさし、現在は暗渠化して見ることはできないが、以前は鴨川の西を南流して相国寺の付近を通過し、現在の今出川通付近で屈曲し、東京極大路(現在の寺町通付近)を南流して六条付近で鴨川に合流していた。(中略)少なくとも二条以北は平安時代も同じところを流れていたとみてよい。」<sup>(註10)</sup>との見解が、ほぼ諸説を集約した妥当なものとして従っておきたい。

なお、永徳3年(1383)の創建以来数回の移転の後、天正11年(1583)、豊臣秀吉によつ



写真2 移築された中川の井(妙満寺)

て寺町通二条下るへの移転を命じられた顕本法華宗総本山妙満寺の境内には、洛陽七井の一つ「中川の井」<sup>(註11)</sup>が所在した(写真2)。

中川に関して興味深いのは『源氏物語』帚木、空蝉巻に、若い光源氏が「中川のわたり」にある紀伊守(左大臣家の家司

か)の邸宅に方違いし、空蟬(紀伊守の継母)や軒端萩(紀伊守の妹)と出会い、恋愛することである。紀伊守の邸宅は、中川の水を苑池に引いた涼しい場所であると記されている。光源氏は、空蟬に出会うため、その後2回も紀伊守の邸宅を訪れるという展開となっている。また、光源氏が「中川のほど」を通して、亡き桐壺帝の麗景殿の女御を訪ねるという場面もある(花散里巻)。このように、『源氏物語』にたびたび「中川のわたり」に関する描写が出てくることについて、注目しておきたい。

さらに、『源氏物語』の空蟬巻に取材した謡曲もある。この謡曲「碁」は、中川に関係しており、あまり知られていないので、以下に紹介してみたい。

## 5

謡曲「碁」(別名「軒端萩」)は、14世紀末から15世紀中頃の能作者・左阿弥の作と伝え、本来は金春系の曲と考えられている。<sup>(注12)</sup>長く廃曲となっていたが、金剛流によって復曲され、金剛謹之助氏が明治20年(1887)、先代宗家・金剛巖氏が昭和37年(1962)11月ほか、現宗家の金剛永謙氏が平成21年(2009)10月に上演されている。観世流でも平成13年(2001)以降、梅若六郎、大槻文蔵氏、観世清和氏の上演があるが、いまだ上演の機会が少ない希曲である。金剛流謡本による概要は次のとおりである。

東国の僧(ワキ)が、東路の道行きを経て都・三条京極中川に到着し、この地は亡父が好み口ずさんだ『源氏物語』に描かれた中川の旧跡であると懐かしく思う。そして、光源氏が空蟬に贈った「空蟬の 身をかへてける 木の下に なほ人がらの なつかしきかな」の歌を詠じると、中川の水を汲みに来た風情の尼姿の里女(前シテ)が登場する。僧が素性を尋ねると、里女はこの旧跡を懐かしく思い、昔を思つて姿を現したと答え、僧に宿を貸し、碁を打つて旅の心を慰めようと言う。僧はこの地は『源氏物語』の空蟬の旧跡であり、空蟬と軒端萩が碁を打つたことを思い起こし、今宵は誰と碁を打つのかと尋ねると、里女は「その空蟬のあま衣の」と空蟬の亡霊であることを明かして姿を消す(中入り)。僧が木の下で旅寝をしていると、空蟬の霊(後シテ)と軒端萩の霊(ツレ)が現れる。そして、碁に関する哲学的な説明や特徴が謡われ、謡曲「源氏供養」と同様の『源氏物語』の巻名づくしの詞章と舞の後、空蟬と軒端萩の霊は実際に碁を打ち、空蟬の霊は敗れて深々とシオル。その後、空蟬の霊は序の舞を舞って、薄衣を脱ぎ捨てて身を隠す態を取ると、僧の夢は覚める。<sup>(注13)</sup>

この謡曲は、『源氏物語』帚木、空蟬巻に見る光源氏と空蟬、軒端萩との恋愛を踏まえながら、同物語で光源氏が垣間見た空蟬と軒端萩が碁を打つ姿を能として再現したものである。三条京極(寺町)の中川あたりが舞台として設定されており、中川の風情を重要な要



素とするとともに、歌枕としての中川を十分詞章に織り込んだ名曲である。

6

道長が貴族社会の頂点に立って栄華を誇っていた時代に、紫式部によって執筆されたのが『源氏物語』である。『紫式部日記』第30段<sup>(註14)</sup>には、寛弘5年(1008)11月1日、道長の娘、一条天皇の中宮・彰子の皇子(敦成親王、後の後一条天皇)出産に係る「御五十日儀」の祝宴の様子が描かれている。この記事の中に、左衛門督(藤原公任)が紫式部に向かって、このあたりに「若紫」さんはお控えかなと呼びかけたとある。この記事によって、『源氏物語』が女房ばかりでなく公卿にまで読まれて、話題となっていたことが知られるのである。紫式部と道長の嫡室・倫子とは再従兄弟であり、紫式部は彰子付きの女房として出仕していた。また、『紫式部日記』第55段では、道長も中宮彰子のもとにあった『源氏物語』を読んで会話や歌を交わしている。さらに、同日記の第56段には、道長の土御門邸渡殿で就寝していた紫式部の局の戸をたたいた男性がいたが、紫式部は拒んだので、翌朝男性から歌が届き、彼女も返歌を送ったとある。男性の名は明記されていないが、これら贈答歌は後に『新勅撰和歌集』に入れられて、撰者の藤原定家は、男性の歌を「法成寺入道前摂政太政大臣」と記した(巻第15恋歌5、1019番。紫式部の返歌は同1020番)。道長と紫式部とは親しい関係にあり、『尊卑分脉』の紫式部の項には「御堂関白道長妾云々」と記されている(第2篇、良門孫)。角田文衛氏は、紫式部は彰子付き女房として出仕し、道長の妾妻の一人となった、これは道長が政略上の要となる自分の娘や孫に仕える官女の長に妾妻を



写真3 「中川のわたり」に所在する廬山寺

配することを常套手段とした故と考える<sup>(註16)</sup>。一方、道長の左大臣という立場や当時の病がちな体調などから、紫式部が「道長妾」であったことを否定する<sup>(註17)</sup>考えもある。その他、『源氏物語』の内容形成に道長が深く関わり、道長を意識して書かれていることは



写真4 「本因坊」発祥の地(寺町通夷川付近)

従来から論じられている。このように、2人の関係については多くの議論があるが、小稿ではこれ以上2人の関係を論じることは差し控え、中川を通して、道長－法成寺－源氏物語－謡曲・碁の関係が浮かび上がることを指摘しておきたい。

さらに、中川と紫

式部に関して、角田文衛氏の的確な指摘がある。つまり、紫式部の曾祖父・中納言藤原兼輔は、左京の京極と鴨川の間、鴨川の堤のもとに邸宅を構え、堤中納言と呼ばれた。紫式部もこの邸宅に住み、『源氏物語』はここで執筆されたと考えられる。邸宅の詳しい所在は、中川の近く、法成寺の北で、その大部分が現在の廬山寺(上京区北之辺町)境内に当たる(写真3)。つまり、紫式部は、「中川のわたり」に住んでいたため、この付近の地理、風土を熟知していたのである。したがって、光源氏が方違いに行った紀伊守の邸宅、帚木、空蟬巻の舞台も中川の付近に設定され、「中川のわたり」を描写した記述は生彩を放っているのである。<sup>(注18)</sup>先に述べたように、『源氏物語』に何回も中川付近の描写が出てくる所以である。この指摘は、平安京の文献学的、考古学的研究に精力を傾けられ、『源氏物語』などの古典にも通暁された角田文衛氏ならではの卓見と言えよう。

## 7

さらに、囲碁に関して、一言付け加えておきたい。安土桃山時代の京都に囲碁の名人、本因坊算砂(日海、1559～1623)が出た。彼は信長、秀吉、家康の囲碁の師となり、近世囲碁の開祖の地位を築き、囲碁界の最高の地位である「碁所」に任じられた。本因坊とは算砂が住した京都の日蓮宗寺院・寂光寺(久遠院)の塔頭の名称である。寂光寺(久遠院)は、現在の京都市上京区室町通出水の地に創建されたが、算砂が活躍していた天正18年(1590)に中京区寺町通夷川付近に移転し、さらに宝永年間に左京区仁王門通東大路西入るに移っている(本因坊の碑や算砂の墓所は左京区の現在地に所在)。ただ、久遠院前町の地名が中川の流

域である寺町通夷川付近に残り、「本因坊」発祥の地として知られている(写真4)。このように、『源氏物語』に空蝉と軒端菖が碁を打った場として設定された紀伊守の邸宅、現在の寺町通付近を実際に流れていた中川の下流に、囲碁界の中心的役割を果たした算砂に関係する寺院が16世紀末に存在したのである。これはあくまで歴史の偶然であるが、まさに京都の歴史の深みを如実に物語っていると言えよう。

以上、法成寺跡の発掘調査から三題断のように駄文を連ねたが、京都市中心部のいたる所には、1200年以上の歴史の蓄積があり、その重さ、深さを今さらながら痛感するのである。そしてこれらを含む文化財を保護し、後世に良好な状態で伝えていかねばならないと、気持ちを新たにす次第である。

(いその・ひろみつ=京都府教育庁指導部文化財保護課)

注1 「京都新聞」平成26年(2014)12月24日朝刊。

注2 『御堂関白記』は、平成25年(2013)6月、ユネスコの「世界の記憶」いわゆる「世界記憶遺産」にも登録された。

注3 家永三郎「法成寺の創建に関する文献」、『法成寺の創建』(『上代仏教思想史研究』畝傍書房)、1942年4月。福山敏男『平等院と中尊寺』(『日本の美術』平凡社)1964年7月。杉山信三「法成寺について」(『院家建築の研究』吉川弘文館)1981年9月。(初出は『奈良国立文化財研究所学報』第19冊、1968年3月)。清水擴「法成寺伽藍の構成と性格」(『平安時代仏教建築史の研究』中央公論美術出版)1992年2月。

注4 北山茂夫『藤原道長』(岩波新書)1970年9月。元木泰雄「三条朝の藤原道長」(『院政期政治史研究』思文閣出版)1996年2月。上島享「藤原道長と院政」(上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館)2001年8月。臈谷寿『藤原道長』(ミネルヴァ書房)2007年5月。山中裕『藤原道長』(吉川弘文館人物叢書)2008年1月。倉本一宏『藤原道長の権力と欲望』(文春新書)2013年5月など。

注5 田坂謙一「探古録(二)」(『考古学雑誌』第4巻第7号)1914年3月。福山敏男『寺院建築の研究一下』(福山敏男著作集3、中央公論美術出版)1983年3月。(初出は福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」、『佛教芸術』第68号、1968年8月)。京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊『平安京左京北辺四坊一第1分冊(公家町形成前)』2004年1月。

注6 引原茂治「法成寺跡・寺町旧域」(『京都府埋蔵文化財情報』第125号、京都府埋蔵文化財調査研究センター)2015年1月。石崎善久・福島孝行「法成寺跡・寺町旧域」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成26年度)』京都府教育委員会)2015年3月。

注7 『名所都鳥』巻第2、愛宕郡中川。『山州名跡志』巻17、洛陽部中河。『都名所図会』巻1、平安城(首)中川など。



- 注8 岸元史明『平安京地誌』（講談社）1974年2月。
- 注9 角田文衛『平安京散策』（京都新聞出版センター）1991年11月、119頁。
- 注10 増渕徹『鴨川と平安京』（門脇禎二・朝尾直弘編著『京の鴨川と橋』思文閣出版）2001年7月、53頁。
- 注11 『都名所図会』巻1、平安城（首）妙塔山妙満寺。さらに、妙満寺は昭和43年（1968）に左京区岩倉幡枝町に移転した。
- 注12 香西精「碁－作者と本説－」（『金剛』第56号）1962年9月、8頁。
- 注13 金剛巖・金剛永謹『金剛流 碁』（檜書店）2009年10月。
- 注14 『紫式部日記』の段の分け方は、中野幸一ほか『新編日本古典文学全集26』（小学館）、1994年9月に拠った。
- 注15 この記事が、源氏物語千年紀や「古典の日」の根拠となっている。
- 注16 角田文衛「道長と紫式部」（角田文衛著作集第7巻『紫式部の世界』法蔵館）、1984年12月。（初出は『古代文化』第14巻第3号、第4号、1965年3月、4月）。
- 注17 今井源衛「紫式部「道長妾」の伝承について」（『今井源衛著作集』第3巻、笠間書院）、2003年7月。
- 注18 角田文衛「紫式部の居宅」（『紫式部とその時代』角川書店）、1966年5月。

